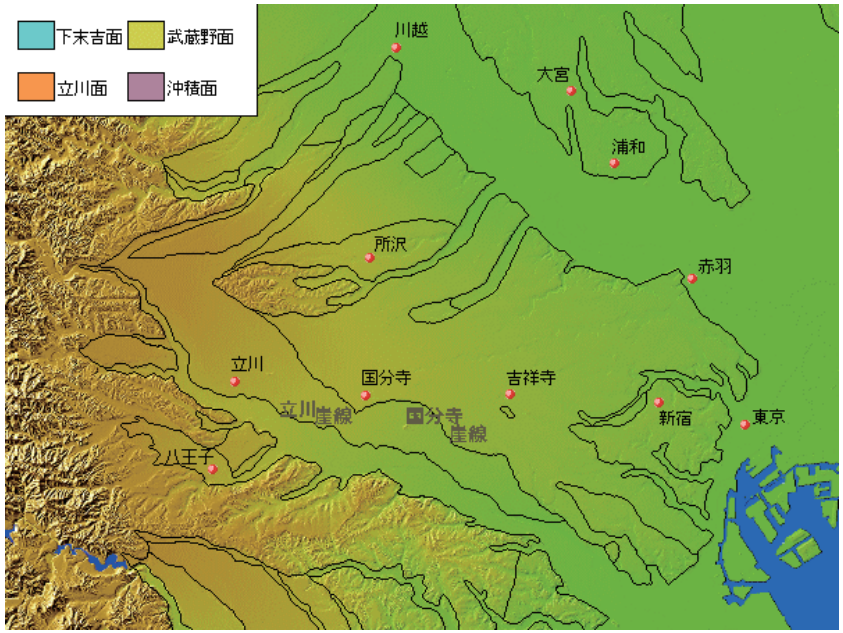
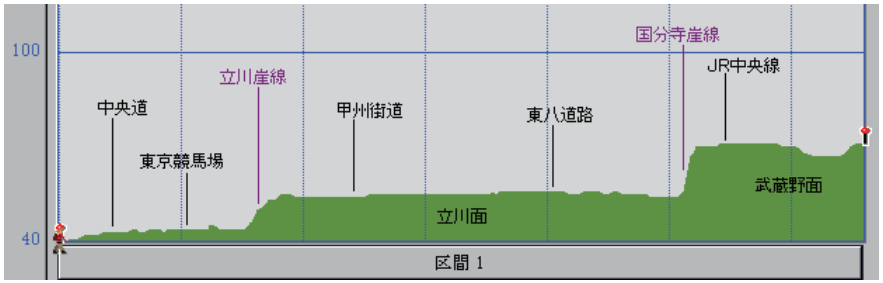
国分寺崖線

2011 年 4 月

西国分寺駅 ⇒ 鎌倉街道 ⇒ 国分尼寺跡 ⇒ 国分寺跡
⇒ 現国分寺、 薬師寺堂 ⇒ お鷹の道 ⇒ 弁財天真姿の池
⇒ 殿ヶ谷庭園⇒ 貫井神社 ⇒ はけの小道 ⇒ 滄浪泉園
⇒ 武蔵小金井駅

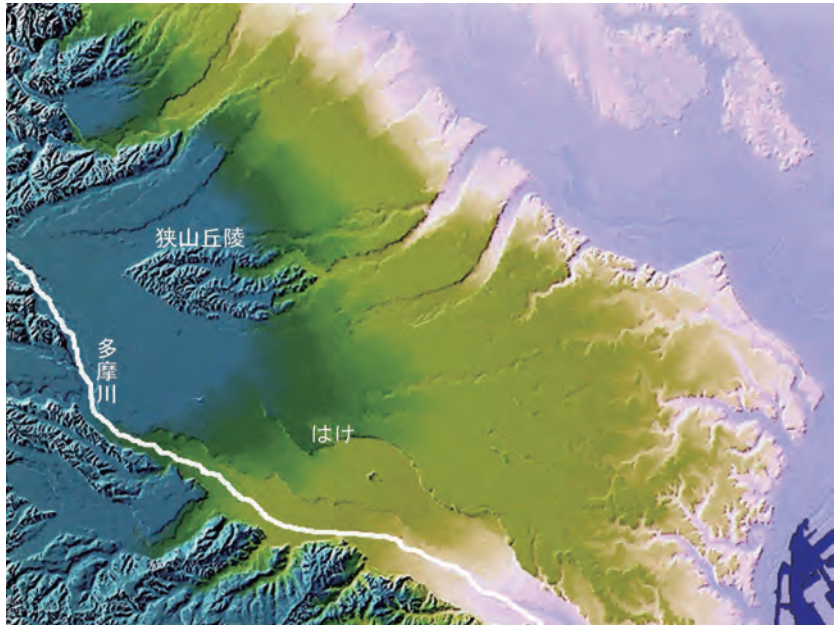
まずこの当りの地形の説明が必要になる。
武蔵野台地は、関東平野西部の荒川と多摩川に挟まれた地域に広がる台地を指す。
東京都区部の西半分、北多摩地域および西多摩地域の一部、所沢市や
狭山市などの地域を含む。川越市は武蔵野台地の北の端に位置する。
多摩川は青梅を扇頂とする扇状地を形成。
この扇状地が武蔵野台地の基盤であり、その上を関東ローム層が
数メートルから十数メートルの厚みをもって堆積している。





段丘と崖線

武蔵野台地では 2 つの河岸段丘が見られる。 1 つは、南側を流れる
多摩川によって形成された立川段丘 1 つは立川段丘の上の高位面をなす
武蔵野段丘各段丘の縁崖を、学術的には、立川崖線、国分寺崖線と
呼んでいる。また、武蔵野の方言ではこの崖線を「ハケ」とか
「ママ」などと呼んだ。



「ハケ」「ママ」には湧水がみられる。特に有名なのは名水百選にも選ばれている
国分寺市の「お鷹の道・真姿の池湧水群」これは国分寺崖線下の湧水で、
多摩川の支流である野川の源流のひとつとなっている。もうひとつ有名なのは、
国立市の「ママ下湧水群」。これは青柳崖線下の湧水。
野川は洪積世の時代の古多摩川の川道であるとされる。
古多摩川が通らなくなったあと国分寺崖線の湧水を集め、崖線に平行して
流下するようになった。

用水路と農業

かつて武蔵野台地の中央、立川面（国分寺崖線の下）には武蔵国の国府や国衙、
国分寺が置かれ、武蔵国の中心となっていた。
これは、この一帯が水に恵まれていたためと考えられる。
一方、崖の上の武蔵野台地は、かつて水の便が悪く、開発が遅れ入会地として
利用される程度であった。これに変化を与えたのは玉川上水の開削である。
野火止用水などの分水路が作られたことで武蔵野台地の一部で水利に変化を
もたらした。今日、武蔵野台地はホウレンソウや小松菜などの葉物野菜、
サツマイモなどの生産地となっている。

武蔵小金井から西国分寺にいたる
ＪＲ中央線の南側は、
地図や写真でみると、武蔵野台地
から下ったかつての川沿いの道だ。
西国分寺の駅を降りて南に向かうと、
まず台地の上、斜面の際に
縄文時代の竪穴式住居群が現われ、
ここがかつて旧多摩川の端に
あったことがわかる。ここをさらに
南に向かうと、鎌倉街道につながる。
武蔵から鎌倉にどのような経路で
道が伸びていたのか想像を
かき立てられる。
ここを下り切ったところに
聖武天皇の時代に立てられた
国分尼寺、国分寺の跡があり、
国分尼寺はすでに調査が終了し、
歴史の跡をたどれる。
国分寺跡の遺跡から北に向かうと、
万葉植物園がある。
寺の奥の崖の傾斜を利用し、
万葉集にのる植物を集められ
160 種類の植物が植えられている。
この万葉植物は一括して
市の天然記念物に指定されている。

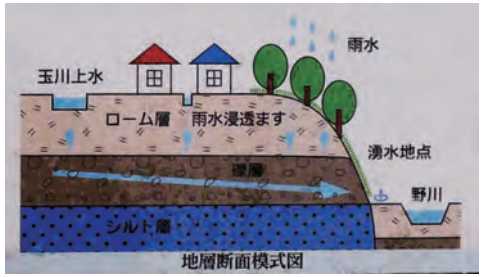
国分尼寺の礎石

万葉植物園

この崖線にそって「水口八十八カ所」と古くから呼ばれた多くの湧水があり、
「お鷹の道・真姿の池湧水群」と名づけられている。
この湧水は関東ローム層や礫層などの地層を多摩川の流れが削ってできた
崖線から湧き出ている。

しかし都市化の進行などで湧水源も湧水量も減少している。真姿の池の名は、
平安時代に玉造小町という女性の病気が国分寺の薬師如来の霊験で治り
元の姿に戻ったことによると伝えられている。

真姿の池



ここから武蔵野台地の縁を東に向かうと、湧き水が豊富で緑豊かなお鷹の道に
続く。江戸時代半ば以降に国分寺の村々は尾張徳川のお鷹場であったことが
この名前の由来とされる。崖線下の湧水は崖に沿って流れ、野川に注いでいる。
Google earth でこの一帯を俯瞰すると、武蔵野台地の崖のところが緑地帯に
なっている。

お鷹の道

この崖線を東に向かって歩き、ゆっくりと左にカーブしながら崖上に上がると、
国分寺駅の近くに殿ヶ谷庭園がある。この庭園は六義園や本郷下の岩崎邸同様に
三菱財閥の庭園である。国分寺駅前通りを東に 300 メートル余り、
小道を探して左折して東に向かうと林の中に東京経済大学の建物がみえる。

大学の南の縁に続く道を東に向かうと貫井神社に出る。この社の裏の
崖下からも水が湧き出している。このあたり野川に沿った崖下の一帯は
はけと呼ばれ、小説「武蔵野夫人」の舞台になったところである。

貫井神社前

「はけ」について

「土地の人はなぜそこが「はけ」と呼ばれるかを知らない。
「はけ」の荻野長作といえば、この辺の農家に多い萩野姓の中でも、
一段と古い家とされているが、人々は単にその長作の家のある高みが
「はけ」なのだと思っている。中央国分寺駅と小金井駅の中間、線路から
平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。野川と呼ばれる
一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細い割に斜面の高いのは、
これがかつて古い地質時代に関東山地から流出して、北は入間川、荒川、
東は東京湾、南は現在の多摩川で限られた広い武蔵野台地を沈殿させた
古代多摩川が、次第に西南に移って行った後で、斜面はその途中作った
最も古い段丘の一つだからである。・・・」
大岡昇平の「武蔵野夫人」の冒頭の部分である。
学生のころに読み、この小説に描かれている風景と心理描写から
単純ではない男と女の関係を学んだような気がした。
いつか「はけ」に行ってみようと思いながら実現しないままでいた。

滄浪泉園もその名からわかるようにかつて豊富な湧き水があった。
木々を分けて崖下に降りると湧水の池が静かに佇んでいた。

滄浪泉園